

りますと湯が濁ります、今の間に這入りを」

「入れて貰ふ」

「御飯の節にお酒でも」

「皆、飲む口や」

「何か御料理のお誂へでも御座りましたら調へて置ます」

「お誂へ、オイ見損ふたらあかんで、俺等の云ふてる事が解らんか、兵庫の若い者やで、大阪邊あたりに氣の利いた肴があるか、そんな腐つた魚は喰ひとうないねん、沖で釣竿の先で針を合して釣り上げた目の下一尺もある鯛を鱗をばりくとふみて三枚におろして下駄の齒の様にブツ切に仕て、山葵醬油をボツ掛けに仕て喰ふてんねん、腹の中で魚がピチくと跳る様な魚を喰ふてるねん、大阪邊あたりの魚を喰ほと云はん、お前とこのえゝ様な物を持つとゐで」

「有難うさんで、どうぞお風呂を」

「オイ、風呂へ行こう」

と三人が風呂の底を抜かんばかりに暴れまして、風呂から揚つて参りますとお膳が出て居ります。

「オイ、宿へ泊つて風呂へ這入つて膳の前へ座つた時程氣持のえゝ物は無いな、ところで明日は兵庫へ歸るねん、今夜で宿屋は泊り終めや、どうや女を呼んでワァーと騒ごか」

「それもよかる……オイ姐はん（手を打つ）」

「は——い、お呼びで」

「姐さん、此處等によさそうな女かんが無いか」

「なんや猫みたゐにおつしやる」

「違ひ無い、その藝妓ひながほしいねん、五六疋生取つて来て」

「猫か狼みたいにおつしやる、承知致しました」

一盃飲んで居りますと、出て参りましたのが藝妓はん、御酒の場所へ女が交ると賑になります、盃がくるくと廻つて居る間に、少し酔が廻つて來まして、

「オイ、陰氣な事は不可ん、三味線弾いて陽氣に騒いで、コラ〜……」（鳴物が這入る）

先刻お泊りになりましたお武家さん、御食事が済みますと、宵から寝られませんでしたので手紙を書いて居りますと、隣座敷では三味線を弾くやら、太鼓を叩くやら、ワァ〜と踊るやら、二階の根太板が一緒で跳板に掛つて、身體が動いて手紙が書けません」

「是れはどうも騒々しい、到底是れでは寝られさうに無いわい、これ伊八……伊八……」

「伊八とん、二階からお手が鳴つてるで、八番のお座敷らしいで」トン〜〜

「へい、旦那さんお呼びで」